

# 翻刻『雪梅芳譚犬の草紙』(十四)

肥留川 嘉子  
隅田 三鈴

## 凡例

一、「翻刻『雪梅芳譚犬の草紙』(十三)」(『京都光華女子大学 研究紀要』第五十一号、平成二十五年十二月)の後を承けて、京都光華女子大学図書館蔵『雪梅芳譚犬の草紙』の「七編下」を、図版を掲げつつ翻刻する。合巻『雪梅芳譚犬の草紙』については、「初編上」の翻刻を掲載した『光華日本文学』第十二号の「凡例」を参照いただきたい。

一、翻刻の方針のみあらためて掲出する。

1、図版は各丁見開きを一面とし、丁付けにより「二ウ、二オ」のように示す。

2、本文翻刻は、やはり「一ウー二オ」のように冠し、改行位置は／で示し、丁移りは「」で示すが、書入れについては丁付けにこだわらない。

3、一面が二枚の絵組から成る場合、翻刻の方のみ半丁ごとに分離する。

4、原文はできる限りそのままとするが、漢字仮名とも、異体字、略体字は現行のものに改めた。

5、読みやすくするため、句読点を補い(ただし、序文の句点は原文のままとし、その旨を断わった)、会話文については「」を、会話中の会話文には「」を補った。原文にある「は」に改めた(原文の「あるいは」「は、」とした)。さらに仮名を適宜、漢字に置き換え、その場合もとの仮名をルビに移した。

6、原文の振り仮名は、右と区別するために( )に入れた。ただし、袋表紙および序文等、一部原文のままの振り仮名に( )をつけなかったところがある。その場合は、その旨を断わった。

7、書入れは本文のあとへ一段下げて、文意の通り易い順に記した。

8、本文中にある読み進めるための合印については、すべて●で統一した。  
9、「初編下」に至って出てきた、本文中の○(段落を改める意識で使用されている模様)は、その位置にそのまま翻刻した。  
一、末尾に、前号までに做って、「七編下」に出るもののみながら、登場人物名(まれに地名もある)と、元の読本『南総里見八犬伝』の相当する名称との対照表を付した。

〔原表紙〕

七編下

笠亭仙果鈔録

一陽齋豊國画

〔原表紙見返し〕

いぬの／さうし

第／七編／下冊

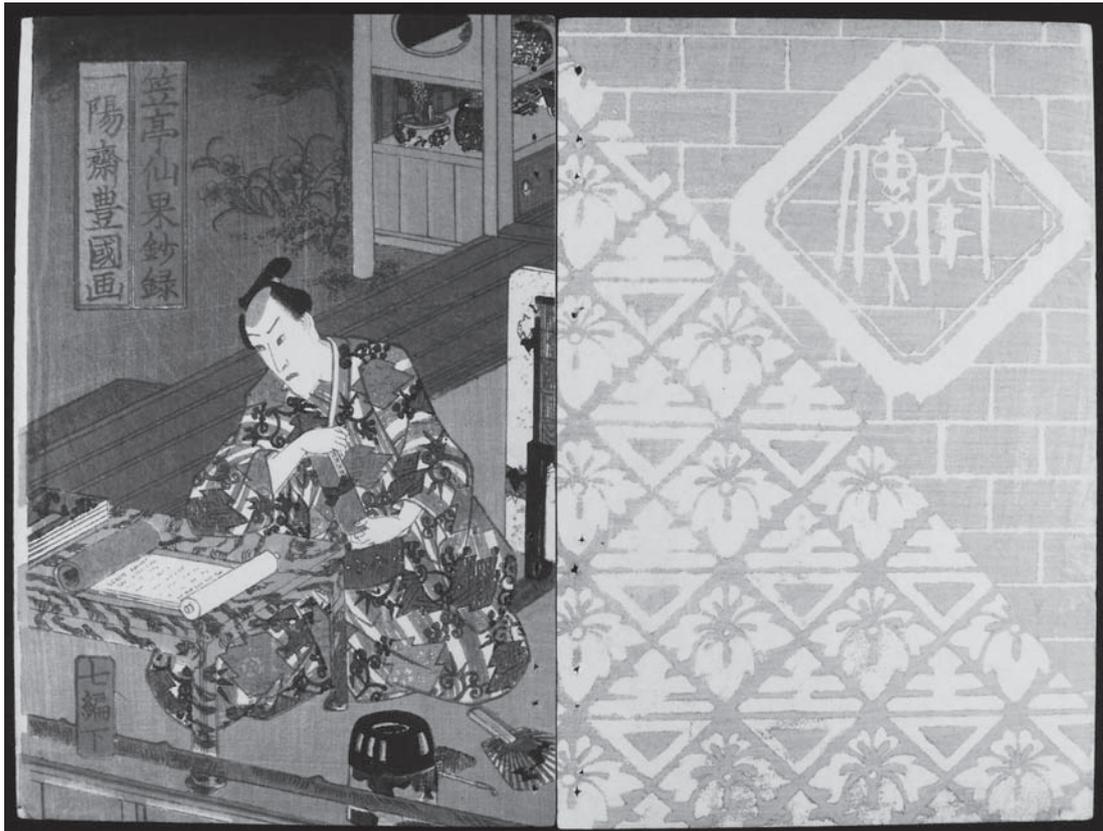
中橋葛吉發兌

己酉新版

仙果鈔録

豊國画圖

仙果筆



図版1 七編上原裏表紙（色刷）、七編下原表紙（色刷）

〔十一才〕

三

二の巻より読み続き 篠兎は身の丈五尺に余り、／逞しく健やかにて人品骨柄雌雄に秀で、／あはれ由々しき男振り。「さて一対の良き夫婦、／はや婚禮を取り結び給へ」と言ふ人多ければ、／非義六は大刀を盗り、事に託け篠兎を追ひ出し、良き婿取らん心なれど、さる色節を悟られては、災ひ我が身に及ばんと、童べの時さへも手に余りし、篠兎なれば、迂闊に指も差し難く、その上人の、思惑良ければかの返答に当惑し、／心を痛め氣を病むほどに、近き辺り／騒ぎ立ち、思ひも寄らず戦起りぬ。／○されば武蔵豊島の郡豊島の領主かけゆぎ多もんたひらの／のぶもりといふ武士あり。その弟／平左エ門倍盛は、煉馬に在りて／聽て煉馬を名字とす。させる大名／ならねども、一族久しく栄えたり。／のぶもり兄弟初めよりあふぎがやつ、／山のうち両管領に／従ひしが、少し恨むる／由ありけるに、山の／うちの老臣／ながをの／はんくわんかけはるは、越後上野切り靡け／謀反の兆しありければ、／こののぶもりに語らふに、一議に及ばず味方に付きぬ。鎌倉には、これを知り、その勢ひのつかざる間に、まづ／としまを討たんとして、その年四月十日あまり●大田／もちすけ、うゑつき／ぎやうぶ、ちはよりのたね／など大将にて不意に／豊島へ押し寄せたり。思ひ設けぬ／こと／ながら●豊島には煉馬、ひらつか、／まるやまの一族等／一つになつて三百余騎、／江古田、池袋に馳せ／向かひ、鎌倉の千／余騎と入り乱れて／戦ふに、初めは／勝つべく見えし／かども、遂に／多勢に切り立て／られ、のぶもりも／倍盛も／乱軍の内に／討たれ、としまの／一家忽ち／滅びぬ。非義六／これを幸ひ／とし、この世の／騒ぎに／託けて／今年は／篠兎と／破魔児が／婚禮、／また来年／年にと／延ばしけり。／されば／破魔児は／つぎへ

○この絵は十四丁目の裏に入るべき序でなれど、一人のそこ／ろなれば此処に出させつ。



図版2 原表紙見返し(色刷)、十一才

〔十一ウー十二オ〕

つゞき 幼きより、親の口より許されて、篠兎は定まる夫ぞと心に固く思ひ染め、生心のつくに従ひ、何とはなしに物、一口言はるゝさへいと嬉しくて、いと懐かしげに、実意を尽くすに、篠兎は心に大志を抱き、殊に礼儀重く守れば露、妄りなる業はなけれど、自然と情けの色は見ゆるに、破魔児は、何より喜ばしく、いと頼もしき男と思ひ、誰告げねども、我が実の親は煉馬の家来と知り、「其方も恋しく懐しけれど、名だに知らねば」と問ふ由もなく、まして此度の負け、戦、定めて縁の人、も討たれて、空しくなりにけん。親兄弟の在り無しも知らぬこの身の味気なき、この憂きことを誰にまた語りて、暫しも慰まん。婚礼こそせね、篠兎様は養ひ親の許した夫、話しても大事はあるまい。良き折もあれかし」と、人無き折を伺ふに、ある日篠兎は部屋に一人、本、読みて居たりしが、良き首尾なりと足音を忍びて、部屋に入らんとす。この時、母の瓶さ、も慌たしく入り来るに、術なく我が身を、翻し、座敷の方へ隠れけり。破魔児を尻目に、じろりと見て、瓶さ、は篠兎に向かひ、「沼田助、親爺の患ひも、昨日今日は薬さへ喉へ入らぬと人の話。一度其方に、会ひたいと、言ふてゐると」右「左よりいふことぢや。弔ひのことてなくは葉札の無心であらう。貧乏人に付き合へば、如何、回つても徳は取れぬ。あら無益しと思へども、久しく懇意に暮らした其方、行く気なら行くが、良い」と言ふに驚き、「先つ頃訪ねしときは、その様に重い様にはなかりしが、六十からの年寄りの傷寒、なれば、氣遣はし。さらば訪ねてやりませう」ト、かたなを提げ、て部屋を出で、篠兎は、彼処へ赴きけり。〇これより前、沼田助が、妻は久しく患ひしが、去年の秋、身罷りけり。元来、貧しき沼田助、なれば、妻の病に飲まずべき薬にも、詰まりし故、篠兎は見かねて、小判一両、密かに彼に、与へけり。誓作、貧しかりしかど、死に、失せし後密かに、見れば、鎧櫃に小判十兩、書付添へて、残しあり。「この金の三ツが、一つ我が弔ひの料になし、残り己が肌身に付け、身のためまた、友達のため肝要のこと、あらば用ゐよ」と記したれば、人の知らば悪しからんと深く、隠せば、伯母も知らず。「たくはへ

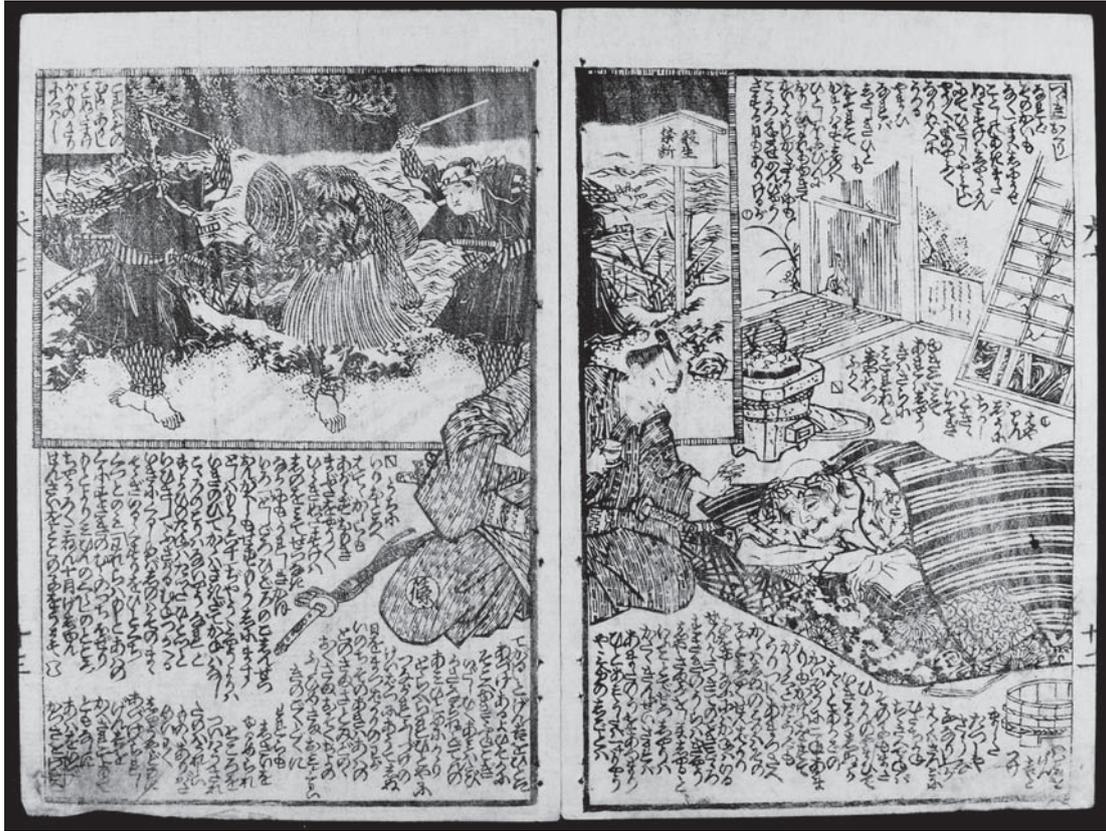


図版3 十一ウ、十二オ

ありや」と聞、し時／三ッ両を出たして巾ひ、／また墓を築く入り用として／また父の三十五日の法事の折／一ッ両を伯母に渡し、「残りは無し」と答へしが、その後に／他ならず父より懇意に／したりし沼田助、難渋／限りもなきを見かね、／密かに金を「つぎへ」

「十二ウー十三オ」

つぎ送りし／なれど／その甲斐も／なく妻は死に失せ、／今年の秋また沼田助は傷寒／にて久しく病み臥し、／やう／くに危ふく／なりぬ。人に／移る／病／なれば／親しき人／も／恐れて／構はず、篠兎は／一入不便に／思ひ、我も行きて／介抱し、岳藏にも／心得させ看病／さする日もありけるが、／●●●●はや／臨／終に／近し／と聞、／急ぎ／行きて見て／あれば、正／気は更に／乱れねど／邪熱／深く／●●●●内に／入り、衰へ／果て、頭も／上がらず、重き／目蓋をやう／く／開き、沼田助は篠兎を見て切なき／中にも嬉しき顔／色。『年頃日頃の御親切、／恩返しもせずもう死にます。／年はもう六十一。定命よりは／生き延びて、嬢は先立て金は無し。／心残りはないやうなれど、／迷ひの種はたつた一つ』と言ひ止して、塞がる胸、悶へる／息に苦しめば、篠兎はそのま、／注ぎ入る、葉を一口／くつと飲み、『我等はもと安房の／国洲崎の村の土穿り。／元来身貧の暮らしのところ、／長禄三年十月下旬／先妻男の子を産みて●●●●名を／玄／吉と／付け／ました。／達者／さうな／子なりしが、母は産後に／肥立ちかね／乳さへ出ねば、／その子もまた／脾疝の病で／生きるか死ぬか、／母と赤子の／介抱に二年あま／りも家業を捨て／がらくた道具も／売り尽くし、剩／へ嬢は死ぬ、残るはその／子と借／銭ばかり。／子を養ふには金は要る。／詮方尽きての出来心、／洲崎の浦は行／者様を惜しましやると／いふことで殺生は／固く禁制。されば、／数多の魚集まり、／一網打たば一／両／や三分の仕事は』手軽しと玄吉を人に／預け、ある夜密かに／其処へ行き、舟漕ぎ／出だし引く網は、度／重ならねど天の／網、人目に掛、り／捕らへられ、獄に／繋がれ柴漬の／刑罰に遭うて死ぬ／日待つばかりの我が／命。その秋は安房の／殿様郷實殿、／奥様、御息女の／婦志姫様お三ッ回／忌の御功德に／我等も／死罪を／緩



図版4 十二ウ、十三オ

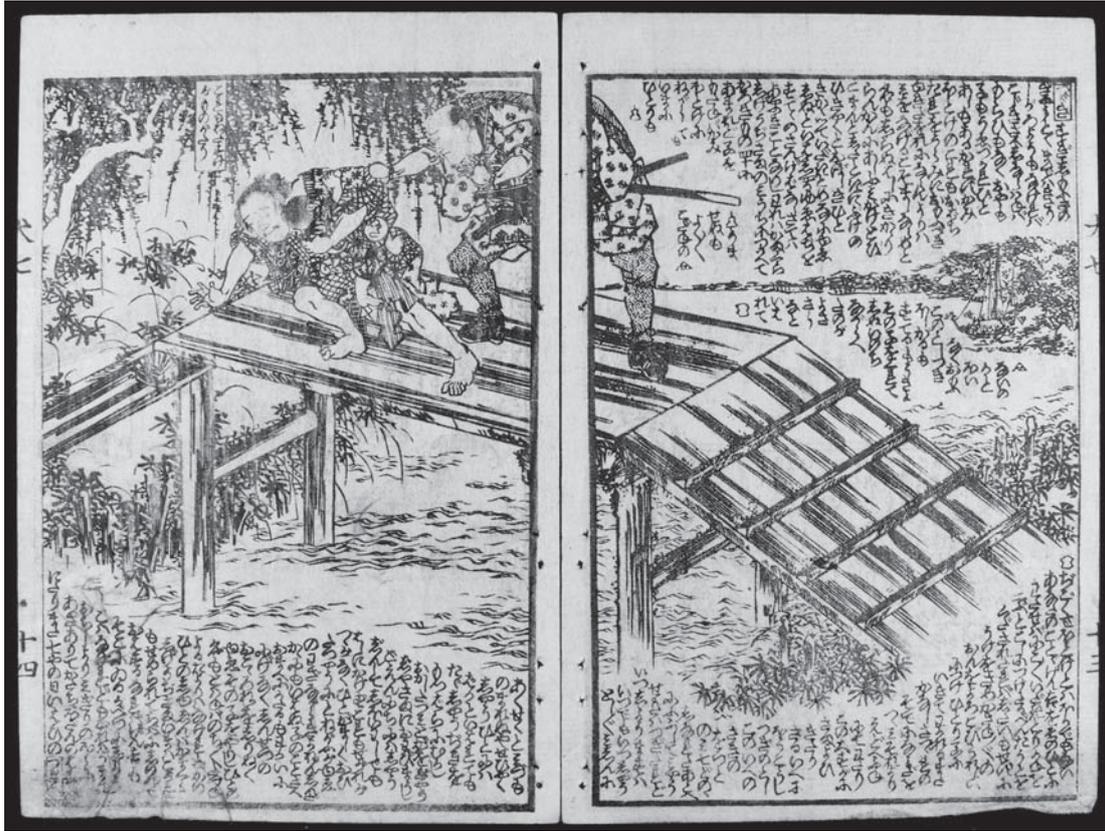
められ、所を追放され、たのは嬉しいもの、有難、迷惑、庄屋殿に預けられし、玄吉を返されて、当て所もなしに、安房を出で、上総をつぎへ

殺生/禁断

これはその昔ありしこと。沼田助が物語に詳し。

〔十三ウ—十四オ〕

つゞき過ぎ、下総の行徳までは来りしが、路用も無ければ、食さへし慣らはねば、貫ひもなく、親も子も飢え疲れ、足も歩かれず。神仏のこれも御罰、誰を恨みに思ふべき。行き倒れにならんよりは、身を投げるこそましならめと、名も知らぬ橋に来か、り、欄干に足踏みかけ、跳び、込まんとした時に、武家の飛脚と思しき人、来か、つて抱き止め、「何故/死ぬ」と言はしやる故、恥を捨て、の懺悔話。「さては危ふきことなりし。我は鎌倉/成氏様の身内に仕へて、軽き者。四十に余れど子を/持たねば、神/仏に願うても、今に一人も産ま/せぬもよくく、子種の●●/無いのかと、本意/なく思ふ、この年月。欲しがるも、捨てるも浮き世。その子をくれて、死ぬ命/存らへたのが、よさ/さう/な」と言はれて、●●「地獄で仏とは他でもない、貴方のこと、玄吉をその人に、渡せばにこく抱き取り、金を二分と腰に付けたる弁当とを、下されたれば、辞退もせず、受け取め、重ねの恩を喜び、嬉しいにつけ一人子に、生きて別れるまた、悲しさ。檻樓の袖に涙を、包み、それより、江戸へ舟にて渡り、この大須賀に、彷徨ひ来り、さる家に、奉公し、次の年、この家の前の夫、の三七殿、死なれた後へ、入夫して、名、跡は継ぎたれど、一升枡はいつでも一升、年々未進に、齷齪と水も、飲まれぬ瘦せ百、姓。人には馬鹿と言はれても、たゞ正直を専らに、昔、犯した罪咎を行、者様にお詫び申し、御縁日には、精進して塩鯛でも、箸にかけず。これも倅が、恙なく人がましく生ひ、立つやうにと願ふが故、の業ながら、去年死んだ、嬢にも言はぬ子のことさへ、御前に語るも、若いに似げなく親切の、御心根を知り抜く、故。その子をやりし人の、名も問はねば、後訪



図版5 十三ウ、十四オ

ね／寄る便りはなけれど、かの／人の主人は鎌倉／成氏様。今は許我を／も  
 攻められて千葉に忍んで／おはするなれば、玄吉も／其処に居るか、別に  
 証／抛はなれども、彼は生まれ／落ちしより右の頬に／痣ありて、形  
 牡丹の花に／似たり。また七夜の日祝ひの つぎへ

これも沼田助／が物語り

〔十四ウー十五オ〕

つゞき 肴に我が料理／たる鯛の腹に緒締め／如き玉ありて文字の／やう  
 なる物見えたり。我は／一字もえ読まねど産者に／見するに、「まこと、読  
 む信しと／いふ字に似たり」と言へり。彼が／守りになすべしと、「長祿三年  
 ／十月廿日誕生。安房国洲崎／沼田助の子玄吉が臍の緒、／産髪並びに感  
 得の玉／一つ」と女共が躡り書き、／仮名混じりに書き記し、臍／の緒もそ  
 の玉も一つにして／守りへ収め、あれが首に／掛けさせたれば、失くせずば  
 今も／あらん。これを証、抛に許我殿へ」おはすることもあるならば、訪ね  
 て／給へ」と物語り。「嗚呼、舌強りて／今朝までも物言ふことのならぬの  
 が、／如何やら斯うやら長話の／せらる、も中治り、今に／最期でござり  
 ませう。末／遥かなる若盛り、身を／謹んで発達あれ」ト言ひつ、／ほろ  
 く／打ち泣けば、篠兎も／涙を止めえず。痣のこと玉のこと、／我が身に  
 思ひ合はすれば、大方／ならぬ奇縁なりと「折を得て下総へ／必ず赴き、  
 その宿所／訪ねて巡り会ひ／申さん。心／安く思ひ／捨て、精出して／  
 薬を飲み／気を張りて／全快あれ。／通して看病／したけれど、か、り  
 うどの身は心／に任せず。／さりとて一度請け合つたる／言葉は金鉄、変  
 改せじ」と言ひつ、猶も懇ろに介抱／されて沼田助は、たゞ手を合は  
 せて／拜むのみ。嘘せ返りて物も言ひえず、／その次の日の暁に、遂に空  
 しく／なりけり。篠兎は父を説き勧め、永楽銭●「七十七文／貸し与へて  
 ／沼田助が野辺／送りを賄はせ、／日柄たちて／かの家共／売り払ふ／時  
 に至り、／七十七文は父へ／返させ、残りの／銭と少しの」田畑は旦那寺へ／  
 寄付させつ。これらは非義六／指図しけれと／実には篠兎が非義六に／勧め  
 てさせしといふ／ことを、誰言ふとなく／皆知りて篠兎が慈悲心／深きを感  
 じ、「早く／役目を譲れかし」と言はざる者は●●なかりけり。／○



図版6 十四ウ、十五オ

沼田助が住みし家を買いたる者は、近頃まであふぎがやつやしゆりのだ  
いぶ／さだまさ主の小姓たり。小賢しき生まれなれば一度は寵愛せら  
れ、請ふるに任せて振る舞ひしかば、人の害になること●●多く／朋輩  
に訴へられ、たち／まちに●●非義露見し鎌倉を／追ひ払は  
れ、父母も／無く妻子も無ければ、薄き縁を頼り／にしてこの大須  
賀へ／彷徨ひ／来つる青地／鱧二郎といふ者なり。年は／二十五  
才に／して男／振りよく／手も能く／書き、三味線、小鼓、一節／切、  
集め、女の／子には浄／瑠璃、三味線、踊りを／さへに教ふれば、浮  
きたる／ことは田舎にも好む者、多ければ、手習ひ／よりは遊芸  
の／弟子は多く／従ひて／彼処の娘、此処の後家と、果ては／浮き名の  
立つもあり。瓶ざ、もこのをと／こを愛し、夫に／取りなし鼠舩に／す  
れば、若者、ためよからぬ男と誹る者もなきにはあら／ねど、非義六  
等は知らず顔／して我が家へ常に出で入りさせつ。その年の冬末、大石  
いほ／ひやうゑのじよの陣代／ひがみじや太夫身ま／かりて、次の年／五月  
の頃つぎへ

〔十五ウ—十六オ〕

つぎその子／虻六あ／とを継ぎ、●●新たに陣代の役目を被り、  
下司ぬるで媒次、いたかは疣八始めとし、若党／僕数多／召し連  
れおち／こちを巡／見し、大須賀にも／巡り来て、その日は／庄屋非義六  
が家に入り来て／一宿せり。非義六は予てより／饗しの手当を／しつ  
、例に過ぎたる／酒肴、膳部も／結構尽くしたり。庚申の日なり／け  
れば庚申／待ちに 四の巻へ

四

三の巻より／託けて／青地を／呼びて唄／謡はせ、また／破魔児をも派手  
やかによそ／ほひ立て、席に呼び据ゑ、酌を取らせ琴など／強ひ勧め  
て弾かせけり。破魔児は未だ見も知らぬ／人／ぐに馴れ／しく物言ひ／





図版8 十六ウ、十七オ

鱧次郎常に言ふやう「我鎌倉にありし日は、祿五百貫充て行はれ  
 近習役の上座たりしが、強ちに我が殿、時めかせ給ひしかば、同  
 役共深く嫉み、数多の者と」徒党を構へ頻りに讒言したりしかば、実  
 には殿は某を悪しとは思さねど●●大勢の志、破らは事の  
 起ころんと、暫く我に暇を賜へど御心より出でしことならね  
 ば、遠からず鎌倉へ召し返さるべき御内意あり。この侘び住まひ  
 も、暫しの間、●●これも気が変はつてよい」と問はず語りに言  
 ひ、舂らすを瓶ぎ、は実、心得、「帰参、叶は、鱧次郎は歴々。  
 婿に取らば我も立身出世の端ならん。うたてや破魔児が  
 道立として、末くとも安穩に置かれぬ、篠兎を慕ふ様子。あれか  
 氣を移さするは、鱧次郎の他にはなし。欲を離れて見た  
 ところか、氣立て、優しく、愛くろしく、芸にかけては何でもござ  
 れ。篠兎も男は、悪くもなければ、恐い顔して氣づかしく、学者か  
 手者か知らねども、都々逸、一つ語はれず、齒向に、あはぬ昔者。  
 二つ取りなら、鱧こそよけれ。よい年をした、此方さへ、夫が無く  
 ば無分別起こして、みたく思はぬ日なし。如何で破魔児よ食ひ付け、か  
 しとますく、彼を親しく呼べば、差し、か、りたる用ありても、非義六  
 より来いと、言へば、鱧次は草履を履きもあへず走り、行きて媚び諂  
 ひ、また途中にて、非義六に会へば、雨の日雪の日も足駄を脱ぎ捨て

つぎへ

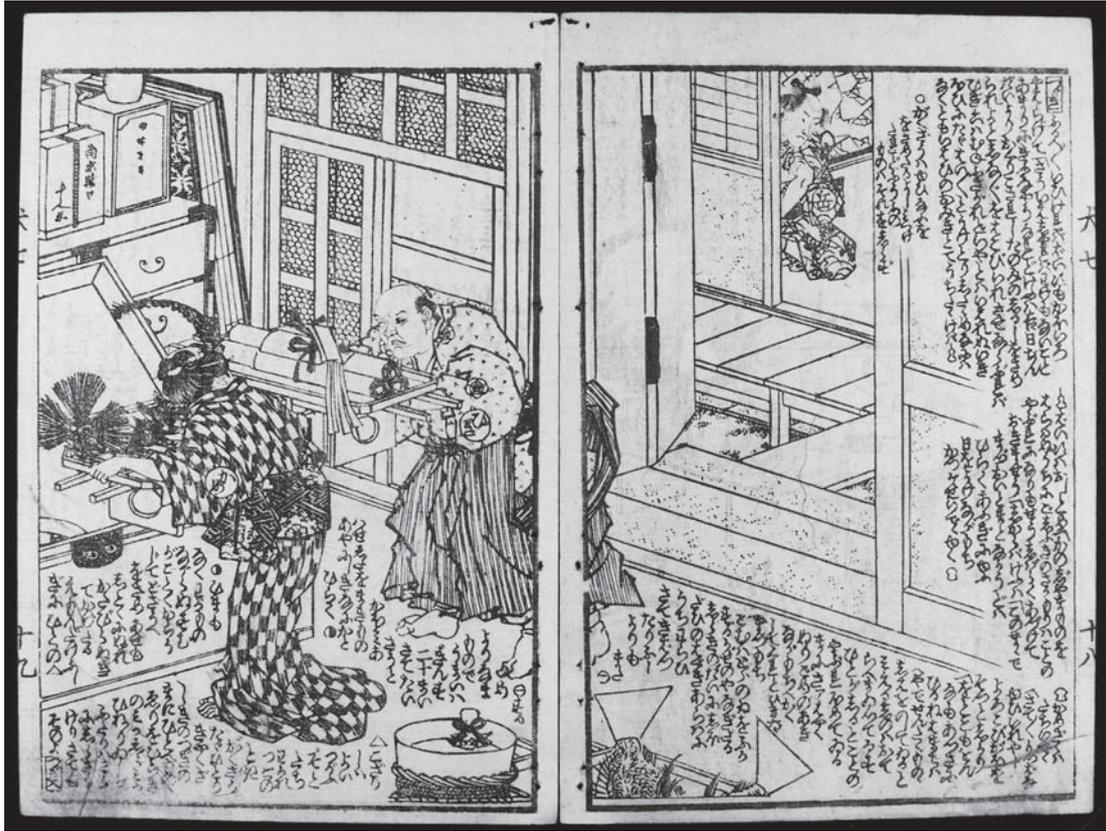
〔十七ウー十八オ〕

つぎ、搔いつく、ばひ、敬る、が、嬉しさに、二人はまた、なき者  
 に、思へり。○されば陣代ひがみ、虬六、これも破魔児に深恋慕し、寝  
 ても覚めても忘る、暇なく、嫁に取らんと思ふにも、良きなか、だちもあれ  
 かしと思ひ悩みてゐる、気色、著く見えければ、下役のぬるで媒次人無き  
 折に、差し向かひ、「何御不足、ない尊公様が、この頃の御顔色、何でも  
 思ひあり、相見の破魔と、見た目は違ひますまい。もし、当たりまし、た  
 らう。天子、將軍、宮様の、姫君はいざ知らず、高、配下の庄  
 屋の娘、奥、様にでも御妾にでも、または、一口御試み、御意次第に



図版9 十七ウ、十八オ

私が御仲人申しませう」ト言へば虬六打ち笑ひ、「俺は歌詠むことは知らぬが百人集のヲ、それよ、色に出にけり我か恋は物や思ふと人の問ふまで。頗る赤面、察しの通り容易きやうにはありながら、破魔児は一人子、婿になる男もありと人の噂、うん、それ、とも承け引くまじ」と吐息を吐けば「これはしたり。それは近頃御案じ過ぐし。羽交の下、あの非義六、立てうと伏せうと君の儘。怖いことは非義六も馬鹿でなければ存して居ませう。もし奥様にと仰らば、第一彼等は身の出世、縦しんばどんな先約があつたとて直変改。其処は拙者が屹度、請け合ひ、お任せあれ」と勸むれば、虬六深くも思ひ量らず、日を選んで様々の頼みの印の●●品調へ、僕に持たせ媒次に付け、非義六が許へぞ遣はしける。それより媒次は非義六に●●娘所望の趣きをねんごろに述べ勸むるに、思ひしに似ず、非義六は迷惑さうに返事もえせず、奥へ入りて瓶ざ、と相談の上出て来り、「思ひがけなく殿様へ娘を差し上げ申せとの、その御仲人もお歴々の貴方様のことであり、冥加に余る親子の幸せ。早速お受けも申したけれど、女房の弟の倅犬須賀、篠兎と申す者、さがたなき、訳あつて娘が婿とし、家も役目も譲り遣はす予ての対談。もと私も娘においても好もしくは存せねど、始めより地下の者共篠兎に、鼻屑を致す故、故障を申せばかれこれ面倒。まづ何事なく篠兎を●●遠ざけ、その後お請け致したく存じます」と言はせもあへず。「言はる、ところ道理か知らず、一渡り聞くとときは何か胡乱な物、言ひ様。嫌ならば嫌、応ならば畏まつたで返事は沢山。治定の上で篠兎とやらは追ひ出さんと遅くはなし。身不肖ながら当城の物書きをも務める者が陣代の媒して、胡乱な返事を取り次か、れうか。胸を定めて言はつしやい。浮かむも沈むも返答次第。当座に決着されぬのは、我を、あな、どののか」ト脅せば、非義六顔青褪め、「アイや、何の、まあ侮るの、引つ張るのと」いふ訳はござりませぬ。内輪に故障のある訳を申さぬも手抜け故、あな、たまでのあれは、お話。優曇華の花とやら、またとは得られぬ娘が幸せ。何の違背を申ませう。さりながら、かの邪魔者を追ひ払ふにも荒立て、はお互ひの為ならねば、こつ



図版 10 十八ウ、十九オ

そりとやらかしませう。まづそれ／まではこの縁談、定めた／ことは極／内く。／暫く／隠して／下さり／ませ。何の／あなた、折角の／仰せを／悪う／存じま／せう」トつぎへ

○破魔児は／座敷に衣／伸しゐて、虬／六か結納／持ち来るを／知らず。

〔十八ウー十九オ〕

つぎ 震へく言ひければ、媒次も顔色／和らげて『さう言はしやれば訳もないこと。／余りに急なやうなれど今日は吉日、陣／代より送り越されし頼みの印、納め／られよ』と品々を運び入れさせ並ぶれば、／非義六は胸塞がれど嫌とは言はれぬいき／ほひに、たゞ「はいく」と受け取り認め、「何は／なくとも祝ひの御神酒」とて打ち叩けば●媒次は押し止め、『かの邪魔者を／払はぬうちに御祝儀の酒盛りは、事の／破れになりませう。暫く預けて／おきませう』『しからば今日は』『このまゝで／まづお暇』と仲人は／開く扇に夕／日を避け、長持／担がせ出で、行く。●瓶ざ、は／立ち出で、／『さてく立派な／結納や』ト喜び顔を／そつと叱り、／『男をもん／なも暑さに／昼寝。破魔児は／部屋で洗濯物、／皺を伸してゐると／見える。篠兎はおて／らへ詣つて留守。／人が知ると事の／破れ、褒めてゐる／間にさア早く／塗籠の空き／長持へ隠／してくれ』と非義六が／まづ持ち／込むは、虎の威を吹か／する風の柳樽、／白木の台に塩／鯛の歯茎露はに／打ち笑ひ、／『さて気張つ／たり。節／よりも／また●』

●する／め／より生／物で、／美味いは／銀子／二十枚。／さて大／層と

／顔見合／はせ舌を巻き物／綾錦、何かと／開く●隙も／なく、我が物

／ながら盗む／が如く辛う／じて土蔵へ／収め、汗も／しと、に濡れ

／帷子、脱ぎ／て掛けたる／衣紋竹、不／思／議に人の●来ざり／しは、

／好い／都合／ぞと／立ち／別れ／つ。この／時／岳藏／た一人、／客座

／敷の次の／間に単衣物、／襟を開き／蚤か虱か／捻り居しが、／二人は

／更／に知らざり／けり。さても／その夜つぎへ

○岳藏は結納を／収めたる由見つけ／たれど、夫婦の／者はそれを知らず。



図版 11 十九ウ、二十オ

〔十九ウー二十オ〕

つゞき臥所に入り、非義六／瓶ざ、寝ながらに篠兎を追ひ／出す 謀 様  
 談合／したりけるが、「この仕合はせの／出るとも知らで鱧次を／懐け  
 て篠兎が仲堰く／柵みとせしことも、今／では一つの妨げと／なりもせん  
 か」と、瓶ざ、か／後悔すれば、非義六／言ひ消し『破魔児は言は、馬鹿  
 正直。篠兎を／夫、固く守れば／鱧次郎にも靡くまじ。／されどもあれ  
 と訳ある／を見たか、如何ぢや」と言ひ／ければ、鱧次の方では／骨を折  
 り、破魔児は更に／気のない様子。却つて／篠兎とは一つに寝たか、／それは  
 知らねと去年／の秋、沼田助が死ぬ／前の日ちらりと怪しい／あの子の素  
 振り。見た後は／目の鞘を外して敵／しく守る程に、それから／互ひに側へ  
 も寄らねど／どのみち邪魔なは篠兎／一人』『その妨げを／払ふ手段、待  
 て、やつと』浮かみ出した。甘い酢では／食へぬ奴。此方も／余程辛い  
 目に遭は／ねばう／まくは／騙／されまい。前／の管／領成氏様は  
 盤作等が元／の主筋。春王安王の／弟御、命目度く／六代の管領  
 職と／なられたところ、／あふぎがやつ、／山のうちの／両管／領と戦  
 して、享徳／四年下総の許我／熊浦といふと／ころに館をしつ／らひ  
 移らせらる。その／後文明／四年に至り、／山のうちのあきさだ殿に／許我  
 の城を攻められて●●千葉むつのかみやすたね殿を待みて／其処に六七年  
 身を隠してござつた／ところ、今年は和睦調／うて／許我の御所へお帰りの  
 あつたと／は知らぬ者なし。そこで篠兎を／斯う／と欺きてその上に／  
 神宮川へ誘ひ出し、其方は／明日昼間の内鱧次郎が／家へ行き、「斯う／  
 せい」と呑み／込ませ、あの男も同／心すれば村雨／丸は此方の物。／危  
 ふい業だが／斯うせねば手／はき彼奴は／騙されぬ。また／岳藏に言ひ  
 つけて途中で／篠兎は殺させよう。／その上で嫁入りに／鱧次郎が小言を  
 言は、陣代殿へ申し／上げ、縛らせうと追ひ遣らうと／それは何の骨  
 も折れず。／たゞ難しきは篠兎めなり。かな／らす悟られ給ふな」と忍び  
 くに／語り合ひ、夏の夜の明るるを知らず／暁方／に少し寝て、思はぬ  
 朝寝をしたりしが、次の日の／八つ下がり、瓶ざ、は村内／なる不動尊へ  
 詣ると／偽り鱧次郎が宿りへ／行くに、手習ふ子供は／皆帰り、三味線の  
 弟子は来ず、主は柱に／身を寄せて、一節切を／吹き居たり。『嗚呼



図版 12 二十ウ、原裏表紙見返し

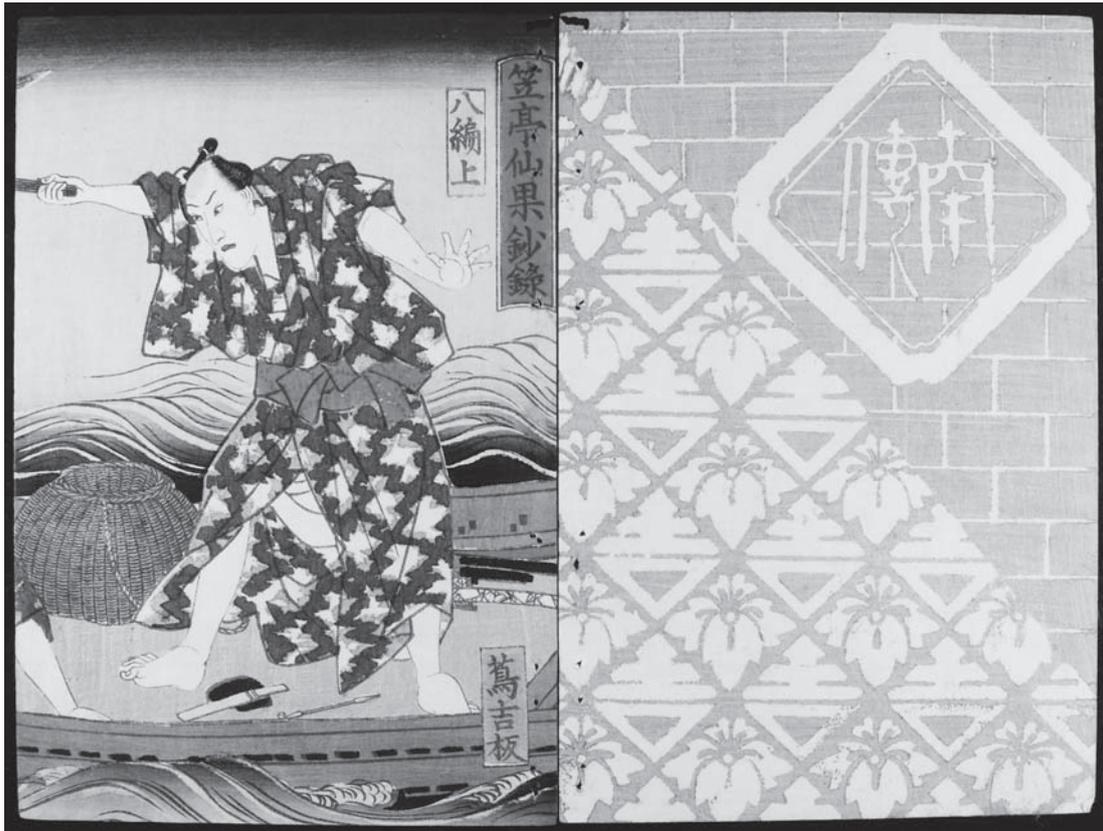
良い音色」／と褒めてゐる声に驚き、／笛差し置き「何方の風の吹き回しか、さてお珍／しい。さア／」と花莫座敷けば／ずいと上がり、「少し内／／話があつて、御無心が／申したさ」御用とあらば／鼻でも耳でも差し上げ／ませう」と簾を下ろせば／「鼻は要らぬが何方かの／耳が欲しい」と口差し／寄せ、「親の口から／言ひにくけれど、お前／と破魔児が訊ある／こと儂は疾づくに／知つてゐる。若い／時は誰しも／あること。一生／見捨てぬ／心なら／此方の／婿に●／した／けれど」あの子と篠児は／地下の衆に、／斯う／の訊／につき夫婦に／しようとする／束をしたは／余儀ない／当座の／理詰め。／宿のも／お前を／えらい／鼻眞。篠児が／ないなら／婿にせう。／篠児は女／房の甥ながら、／遺恨のある／誓作が子。／お前を／婿に／したいとは／時折節／言うての／ところ、時節か／来たら／斯うやつて／斯うすれば、／喜んで●／篠児は／他国へ／出るは／定。／と／ころで／あれが／子／供の／時、／婿／引き／出に／やつた／刀、／大須賀／氏の／つきへ

此絵解き／八編の初めに／あり

(二十ウ)

つゞき 家の宝／やつておくは何より／惜しい。あの名剣を／取り返すに彼奴も／痴れ者、有り体に／言ふ時は大騒ぎ。／そこで斯うして／斯うやつて、非義六／殿、腰の物と／篠児が件の／刀とを掬り／替へておくれで／ないか。長／短は／予てより／同じ／やうに／しておけば、／鞘の合はぬ／ことはなし。／首尾良く／ゆけばお前は／花婿。一／骨折つてゐる／氣はないか」ト／語らへば、鱧次郎●／少し／顔を／赤くして／「年若な／素浪人／人かましく／思し召し、／このやうな／一大事／明かして一味／せよとの仰せ。／何の御辞退／申ませう。／さて嬢様と／訊のあるなん／ど、は迷惑／至極。金で／撞木を叩く／やうに此方は／鳴つても彼方は／鳴らず。嗚呼片／思ひの鮑の／珠、目葉／ほども／私の／言ふことは聞か／しやらぬ。あの子が●／如何／でも「嫌／」と／仰つては、骨／ばかり折つた／挙げ句が／ひよつともし、／つまらぬものに／なつたらば」ト

●●念を／押す／こそ／道理／なれ。



図版 13 七編下原裏表紙、八編上原表紙

豊国画 仙果鈔録

〔原裏表紙見返し〕

嘉／永／七／甲／寅／春／新／鐫／目／録

〔振り仮名は原文のまま〕

- おほみそかあけぼのさうし 廿編／廿編 京山作／芳綱画
- 大晦日曙草紙 廿編／廿編 京山作／芳綱画
- れんのつばさまじりきえん 連理翅 山雞奇縁 五編／六尾 西馬補／芳綱画
- はつげんでんいぬ 八犬傳犬の草紙 廿八編／ヨリ／卅三編／マテ 仙果録／豊国画／國貞画
- まつらぶねみ さほのつまつこと 松浦船水棹婦言 三／四 仙果録／國芳画
- おとしたまひしやうねんし 御贄美少年始 十編／十二編 同録／國綱画
- やえなでしかさねものがたり 八重撫子累物語 二／三 同録／國貞画
- けうかくでんむきなえと 俠客傳 摸略説 十編／十二編 西馬譯／同画
- はなのみがさうわものがたり 花 蓑笠梅雅物語 三／四 西馬譯／國輝画
- しまめぐりなまのあさひな 嶋巡 浪間朝日奈 六編／七編 種員譯／國貞画
- こはだこへいしものがたり 小幡小平次物語 初／二／三 五瓶作／國貞画
- しほや／ぶんちう 古今草紙合 十一編／十二編 仙果作／國輝画

東都南傳馬町一丁目／地本 草紙問屋葛屋吉蔵板

登場人物一覧 (七編下)

次に『雪梅芳譚犬の草紙』七編下の登場人物名をかかけ(読み仮名・漢字とも表記は原文のまま)、その下の【】に、相当する『南総里見八犬伝』の登場人物(その他)の名を示す。

犬須賀篠見成孝【犬塚信乃成孝】

磐作の子。磐作の死後、非義六夫婦に養われる。病床に臥した沼田助から彼の生き別れた子の玄吉が痣と玉を持つてゐることを聞かされ、いずれ必ず玄吉を訪ね出して会うことを約束した。

犬須賀磐作一戌【犬塚番作一戌】

篠見の父。自らの不自由な身体や篠見の将来を憂い、亡父犬須賀正作参成【大塚匠作三成】から譲り受けた亡君持氏【足利持氏】の宝刀村雨丸【村雨】を篠見に託して自害した。会話にのみ登場。

沼田助【糠助】

大須賀村【大塚村】の百姓。元は安房国洲崎の村にいて、先妻との間に玄吉をもうけたが、妻に先立たれてしまう。玄吉を育てるために禁漁地であった洲崎の浦で密漁をして見つかり、死罪を言い渡されるが、赦され国外追放となる。下総国行徳【行徳】の橋で玄吉と共に身を投げようとするとところを、通りがかった成氏の家来の侍に止められ、玄吉をその侍に託した。そのことを篠見に話した翌日に病死する。

玄吉【玄吉】

長祿三年十月二十日、安房国洲崎にて沼田助の子として生まれる。右の頬に痣があり、また沼田助が七夜の祝いに鯛の腹を捌いた時、信という字の玉が出てきた。会話にのみ登場。

岳藏【額藏】

非義六の下男。篠見と兄弟の義を結ぶが、非義六夫婦を欺くため仲の悪

いふりをしてゐる。ぬるで媒次がもたらした虬六から破魔児への結納の品を、非義六夫婦が密かに受け取るのを目撃する。

大須賀非義六【大塚墓六】

瓶ざ、に入り婚して大須賀村の村長になつてゐる。磐作の死後、周りの目を気にして篠見を引き取り養育してゐた。虬六と破魔児との縁談を媒次から脅しのような形で持ちかけられ、承諾した。これを機に篠見から村雨丸を奪おうと瓶ざ、と共に画策する。

瓶ざ、【龜篠】

磐作の腹違いの姉で、篠見の伯母。夫非義六と共に謀し、青地鯉二郎に、破魔児の婿にする代わりにと、篠見が持つ村雨丸を非義六の刀とすり替えるように唆す。

破魔児【浜路】

非義六・瓶ざ、の養女。許婚の篠見を慕う。実の親が煉馬平左エ門の家来であることを知る。

青地鯉二郎【網乾左母二郎】

二十五歳。元はあふぎがやつのしゆりのだいぶさだまさ【扇 谷修理大夫定正】の小姓であったが、鎌倉から追い出されて浪人となり、大須賀村に住む。諸芸に秀で、美男であったため瓶ざ、に気に入られる。

ひがみ虬六【簸上宮六】

大石ひやうゑのじよう【大石兵衛尉】の陣代ひがみじや太夫【簸上蛇太夫】の子。父の死後跡を継ぎ、巡見した先の非義六の家で破魔児に一目惚れをする。

ぬるで媒次【軍木五倍二】

虬六の下司。虬六と破魔児の縁談を取り持った。

いたかは疣八【卒川菴八】

虬六の下司。

山のうち【山内】

あふぎがやつ【扇谷】

いずれも鎌倉の官領職。

としまかげゆぎゑもんだひらののぶもり【豊嶋勘解由左衛門尉平信盛】

武蔵国豊島【豊嶋】の領主。初めは山のうち・あふぎがやつ両管領に

従っていたが、謀反を起こしたながをかげはるに味方して、煉馬・ひら

つか【平塚】・まるやま【円塚】等と共に江古田【江古田】・池袋

【池袋】にて両管領軍と戦い、討たれて一族諸共滅びた。

煉馬平左エ門尉倍盛【煉馬平左衛門倍盛】

としまかげゆぎゑもんの弟。兄と共にながをかげはるに味方するが、両

管領軍の急襲により討たれた。

ながをのはんくわんかげはる【長尾判官平景春】

山のうちの老臣だが、としま・煉馬兄弟等と共に謀反を起こした。

大田もちすけ【巨田備中介持資】

うゑつきぎやうぶ【植杉刑部少輔】

ちばよりのたね【千葉介自胤】

三人とも山のうち・あふぎがやつ両管領軍の大将。謀反を起こしたとし  
ま・煉馬兄弟等と戦い、これらを滅ぼした。

成氏【成氏】

持氏の末子。春王【春王】・安王【安王】の弟。山のうち・あふぎが

やつ両管領と争うも、享徳四年下総国許我【許我】の熊浦【熊

浦】へと逃れた。しかし文明四年山のうちのあきさだ【山内顯定】に

攻められ、千葉むつのかみやすたね【千葉陸奥守康胤】の許へ身を隠  
し、文明九年両管領と和睦して許我に戻った。会話にのみ登場。